

車いす学生「優秀」の美

23日にある大阪大学の卒業式で、身体にハンディキャップを抱えながら研究を続けた基礎工学部の学生2人が、卒業証書を手にする。在学中に交通事故に遭い、4年余の休学を強いられた男子学生と、小学生の時に水泳の事故で下半身に障害を負った女子学生。周囲の手助けを得て車いすで研究や実験に取り組み、2人ともトップクラスの成績優秀者として賞を贈られることになった。「懸命な姿に多くのことを学んだ」。2人を支えた教員や学生らは声をそろえる。

(阪本輝昭)

阪大基礎工学部の2人



指導教授らと談笑する中市さん(手前左)と高見さん(同右) 大阪府豊中市の阪大豊中キャンパスで

あすの卒業式で表彰

情報科学科の中市秀哉さん(27) 兵庫県西宮市

と、システム科学科の高見愛さん(22) 同県尼崎市。中市さんはソフトウェアのプログラムからバグ(欠陥)を見つけ出すためのツール試作に取り組む、高見さんはコンピュータを用いて、人間の表情の変化に顔の筋肉がどう作用しているかを解き明かす研究に打ち込んだ。

こうした研究成果と、日頃の成績などが総合的に評価され、中市さんは学科で首席の成績を収めた学生に贈られる「楠本賞」を、高見さんは学科の中にあるコース別でトップの成績を収めた学生に贈られる「学部長賞」をそれぞれ受賞する。

休学4年越え

中市さんは98年4月に化学応用科学科に入学。準硬式野球部に入り、大學生生活を満喫していた。

だが、2年生の夏、旅行先の北海道で交通事故に遭い、頸椎を損傷。胸から下と、両手の指の機能がまひした。入院とリハビリで、4年余り休学し、03年4月に本格的に復学。身体に障害があっても比較的実験がしやすい情報科学科に移った。

シャープペンを固定した器具を手首に取り付け、歯を食いしばってノートを取った。だが、教員の板書のスピードが速くて、ついていけないことも多く、実験器具や細かい配線の設置作業をほかの学生たちが手伝った。実験が時間内に終わらない時は家に持ち帰り、母親に手伝ってもらったこともある。入学して9年。「みんなに迷惑をかけているという思いが強かった。卒業できるのは周囲の支えのおかげ。やめずに続けてきて本当に良かった」と目を潤ませる。4月からはシステム開発会社に就職し、システムエンジニアとして働く予定だ。

指導した菊野亨教授は「中市さんの研究成果は、複数の国際学会で採択されるほど質が高い。

本人の希望もあり、ほかの学生より課題を減らすなどの特別な措置は一切しなかった」と振り返る。

さらに研究を

一方、高見さんは7歳の時、通っていた水泳教室での事故で胸椎を損傷し、下半身が不自由になった。中学、高校と理科学科目が好きで、阪大へのおこがれがあったという。ふだんは車いすで生活しているが、「小さいころから障害とつきあっ

てきたので、研究や授業などでも特に不便だと感じたことはない」。4月からは大学院に進み、さらに研究を深めたいという。高見さんを直接指導した伊藤京子助手は「熱心の一つひとつの研究に取り組み姿勢には、研究者として学ぶ点が多い」と話す。

23日に卒業を迎える大阪大学の学生は計2700人。中市さんと高見さんの在籍する基礎工学部は、430人が巣立つ。